

## 習近平と文化大革命——現代に落とす文革の影

矢吹 晋 (横浜市立大学名誉教授)

### I. 習近平の下放・文革体験

習近平の経歴は、2012年11月に第18回党大会が開かれ、トップ指導者に選出された際に発表されたものと、その後、中国当局の書籍<sup>1</sup>で解説されたものを合わせて描くと、以下のごとくである。

——1953年6月生、陝西富平人、1966年に文化大革命が始まった時は13歳、北京「八一初中」<sup>2</sup>の1年生であった。1968年「初中3年」（日本の中学3年級）の時、北京25中学という普通校に転校させられ、それから陝西省延川県に下放した。15～16歳であった。1969～1975年、16～22歳を「下放青年、知識青年」として陝西省延川県文安駅公社梁家河大隊の「知識青年、党支部書記」として生活した<sup>3</sup>。1975～1979年（22～26歳）、推薦により、清華大学に合格し、化学工業系基本有機合成を専攻した。

——まだ幼かった習氏は、1962年（9歳）から、中国共産党元老のひとりだった父親・習仲勳氏の冤罪事件（補注1）に巻き込まれ差別された。「文化大革命」中に、吊るし上げられ、飢えを経験し、あちこちをさまよひ、拘禁されたことさえあった。1969年の初頭、16歳にも満たなかった習氏は陝西省北部農村の生産隊への下放を自ら志願して、延川県の文安駅人民公社梁家河生産大隊にやって来た<sup>4</sup>。山の崖に掘った洞穴式住居（窑洞）には、特にノミが多く、刺されて全身が水泡だらけになり、オンドルに敷いたアンペラの下に農薬を撒きノミを退治するしかなかった。この数年間、ほとんど休まずに野良仕事をし、石炭を運び、土嚢を積み堰を作り、肥え桶を担ぐなど、どんな仕事もし、どんな苦勞もいとわなかった。

——村人たちは、50キロ、100キロの麦を片方の肩で担いで5キロの山道を何時間も歩く習氏を見て、「苦勞にもつらさにもよく耐えるいい若者だ」と感じた。「力を惜しまず働く」「知識が有り、アイデアに富む」。習氏は次第に農民たちに信用され、中国共産主義青年団と中国共産党に相次いで加入し、生産大隊党支部の書記にも選ばれた。陝北の黄土高原の生活は苦難に満ち

<sup>1</sup> 習近平『国政運営を語る』北京、外文出版社、2014年、付録「人民大衆はわれわれの力の源泉である」

<sup>2</sup> この学校は1947年設立、聂榮臻が創始者でその弟子が発展させた名門校である。現在の生徒数は約4200名、教職員は422あまり。<http://www.bayims.cn/column-10.html>

<sup>3</sup> 延川県文安駅公社梁家河大隊の北京知識青年は15人で、習近平のほか、王翠玉・徐晶・赵华安・雷平生・佟达宁・杨京生・王燕生・戴明・梁万生・慕丰安・慕爱平・齐丽梅・李京鲜・张春富だったという。

<sup>4</sup> 習近平の下放中について新華社は『中共高层新阵容』で解説している。2013-05-06 来源：大公网 [http://news.takungpao.com/mainland/zgzzq/2013-05/1590913\\_2.html](http://news.takungpao.com/mainland/zgzzq/2013-05/1590913_2.html)

ていたが、自らを鍛え、才能を発揮する初舞台となった。耕地を増やすため、寒い冬の農閑期に、習氏は村民を率いて土留めのダムを修築したが、率先して裸足で氷の中に立って氷に穴を開け、ダムの基盤をきちんと整理した。また、村の鍛冶屋に声を掛け、鉄業社を設立し、農機具を自給自足できるようにしたばかりか、付近の村へ売ることによって村全体の収入を増やした。

——新聞で四川省ではメタンガスを利用していることを知ると、経験を聞くために駆け付け、村に戻ると、陝北初のメタンガス備蓄池を作り、村民を率いて陝西省初のメタンガス利用村として、村民たちの炊事、照明の困難を解決した。また、村に下放されていた知識青年に分け与えられた白い小麦粉のマントウを村民に譲り、自分はヌカ（糠）などを混ぜてつくった粗末なものを食べていた。習氏は先進的知識青年として、北京から荷台付きのオート三輪車を奨励品として支給された。当時、地元では非常に珍しいものだったが、習氏はこれを手動トラクターや製粉機、もみから吹き上げ機、吸い上げポンプなどの農機具と取り換え、村人に使ってもらった。学業は中断されたが、習氏はずっと知識を渴望し、本を読み独学を続けた。梁家河村に下放された時、重たい一箱の本を運んできた。昼間は働き、休憩時間に本を読み、羊を放牧する時も、黄土高原の坂の上で本を読んだ。夜になると、暗い灯油の灯りの下で、深夜まで本を読み続けた。村人たちの記憶によると、習氏は食事の時も食べながら「レンガのような厚さの本」を読んでいたそうだ。

——43年前、習氏は知識青年として陝北農村の生産隊に下放され、そこで7年働いたが、最初の「公務」は中国共産党組織体系の「細胞」である生産大隊（行政村）の党支部書記だった。陝西省から北京市へ、河北省から福建省へ、浙江省から上海市へ、西部の貧困地区から国家の政治・文化中心地へ、東部の立ち後れた地区から沿海の先進地区へ、その政治経歴は村、県、市（地区）、省（直轄市）と中央の党・政府・軍隊の主要ポストすべてに及んでいる。7年間にわたる農村生活、7年間にわたって共にした苦楽——黄土高原の純朴な村人たちとつらい仕事の苦労を分かち合い、いっしょに食べ、いっしょに住み、いっしょに働いた歳月は、習氏にとって、現地の民衆と深い友情を結んだばかりでなく、何が中国の農村なのか、何が一般大衆の喜怒哀楽なのか、何が中国の基本的な国情なのか、理解するよい機会だった。習氏は人民に対する深い愛、足元の担当地区に対する責任感を習氏の人生の目標の中に深く刻み込んだ。習氏は自分の人生で最も力になってくれたのは「革命の大先輩と陝北のあの村人たちだ」と率直に話したことがある。16歳足らずで黄土高原に来た当時は、途方に暮れ、いろいろな迷いがあった。22歳でここを離れた時、習氏は揺るぎない人生の目標を持った——「人民のために地道に働く」がそれだった——。

以上の経歴紹介は、習近平が中国共産党のトップ指導者に選ばれた2012年前後に、本人が語った回顧談を中心に当局が「民に親しまれる指導者イメージ」を作るために描かれたもので

あり、多かれ少なかれ、若干の修飾語が正確さを欠くことは免れないであろう。たとえば「50 キロ、100 キロの麦を片方の肩で担いで5 キロの山道を何時間も歩く習氏」の原文は、「能挑一二百斤麦子走10里山路长时间不换肩的习近平」であり、これは「刻苦に耐える若者」（是个吃苦耐劳的好后生）を示す形容句であり、必ずしも、「100 キロの麦を片方の肩で担いで5 キロの山道を何時間も歩いた」という事実の描写ではあるまい。都会育ちの若者にそのような体力があるとは想定しにくい。

とはいえ、(1) 基本的には事実を踏まえて、(2) そして、「有名歌手彭麗媛の夫」程度にしき認識されていなかった習近平像を浮かび上がらせるために描かれたことは確かとみてよい。

(3) さらに重要なことだが、父親・習仲勳が文革前夜の62年10月の8期10中全会から、反党集団の一味と認定され、國務院副総理の職務を事実上停止されていたので、66年初夏に文革が始まった時期にも、習近平が紅衛兵運動に参加して「加害者」になることはなかったはずだ。文革期の若者たちは紅衛兵運動としての「加害者」<sup>5</sup>の立場、その後、下放させられ貧しい農村生活を体験する「被害者」の立場が交錯するために、文革の評価においてアンビバレントな立場に置かれるが、習近平の場合、紅衛兵としての「加害者」体験を欠くことは、注目すべきであろう。

## II. 「プチ毛沢東」としての習近平

### II-1. 習近平記者会見

今から2年半前のこと、2012年11月14日、私は党大会を終えて中国共産党のトップに選ばれたばかりの習近平記者会見をインターネットで凝視していた。数十分の記者会見を聞いているうちに、私は一昔前にタイムスリップした錯覚に陥った。習近平の口から次から次へとナツメロのように毛沢東語録が飛び出したからだ。曰く、大衆路線、曰く、人民のために奉仕する、等々。

私はテレビ画面に釘付けになりながら、習近平とはどんな男か、あれこれ考えた。清華大学を出て、最初にやった仕事は、職業軍人ではなく、文民の立場で初めて国防部長を務めた耿飈国防部長の秘書であった。これはおそらく父親・習仲勳が旧知の耿飈に息子を預けたものか。彼が軍事委員会の周辺を知っていることは重要かもしれない。前述の経歴に「中央军委办公厅秘书（現役）」の一句が見える。彼は国防部長耿飈の秘書を務めた後、耿飈が中央軍事委員会弁公庁主任となったときに、その秘書を務めたが、これは軍籍のない者は就任できない重要ポス

---

<sup>5</sup> 極端な場合は、殺人の加害者であった。たとえば土屋昌明「中国の「民間ドキュメンタリー」とはなにか — 胡傑監督へのインタビュー」『専修大学社会科学研究所月報』2013年4月号、57～58ページ。

トだ。それゆえ、この時期に習近平は「軍籍」に登録されたわけだ。大学卒業直後の若い時期に彼が軍事委員会の弁公庁という枢要な部門に一時属したことは、のちに軍事委員会の虎退治を断行するうえで、一つの重要な要素とみてよい。

1997年9月の第15回党大会で習近平は中央候補委員に選ばれ、中央幹部としての歩みを始めたが、その印象は強烈であった。得票順からして序列は151名中のビリなのだ。中央委員193名は筆画順に並べるので、得票数は分からない。しかし候補委員は得票順を明らかにしておく必要がある。中央委員に欠員が生じた場合に繰り上げ当選させるためだ。このとき習近平は、辛うじて候補委員に当選はしたものの、序列ビリ。これは何を意味するのか。

ちなみにビリから二番目が鄧小平の長男鄧樸方であり、いま習近平の片腕として虎退治を進めている王岐山はビリから七番目であった。3人の太子党はなぜかくも評判が悪いのか。それはおそらくは3人の「個性や能力のため」ではない。当時は鄧小平の没後まだ半年、「太子党を政治権力の中核に加えるなかれ」という鄧小平ら革命第一世代の良識、自制が働いていた。文革期には実権派子弟は肩身が狭かった。その後名誉回復は行われたが、「文革の遺風」はまだ残り、習近平ら太子党は小さくなっていた。長老陳雲の長男陳元に至っては、習近平より8歳年上だが、習近平より5年遅れて2002年によく候補委員になった。そしてその序列はビリから6番目であった。薄一波の息子薄熙来は、1997年には候補委員にさえ選ばれず、2002年に候補委員を飛び越えて直接中央委員に選ばれた。年下の習近平に追い越された薄熙来の敵愾心がやがて身を滅ぼす。いずれにせよ、15回大会（1997年）、16回大会（2002年）当時は、まだ中国共産党が自らの権力乱用を自制する良識が働いていた。この自制心を次第々々に解いて、ついには誰憚ることなく権力を乱用したのが江沢民と江沢民人脈だ。軍のトップや政法委員会書記が処分される現代とは大違いではないか。私はテレビを見ながら習近平＝「プチ毛沢東」のあだ名をつけた。

## II-2. 習近平の虎退治と権力固め作戦

2015年3月、習近平は名実ともに「プチ毛沢東」ぶりを発揮する。一連の全人代がらみの報道について「ピラミッド型の権力モデル」と呼ぶ評論も現れた<sup>6</sup>。習近平はどう変身したのか。2012年秋、党大会でトップに就任した直後の記者会見の写真では7名の常務委員の真ん中に並ぶ一人であったが、それから2年を経て、テレビカメラの焦点は、習近平の「標準写真」像にズームインされ、他の6名がどんどん後景に退いた。このイメージの変化を象徴するニュースが1月16日に報じられた。この日、トップセブンからなる中央政治局常務委員会議は終日会議を開いた。

<sup>6</sup> たとえば牟伝珩の論評「中南海で“集団指導制、を覆す”香港『争鳴』2015年3月号。

日本の国会に当たる全人大常委会（委員長＝張徳江）、内閣に当たる國務院（総理＝李克強）、参議院に擬せられる全国政協（主席＝俞正声）、最高裁に当たる最高人民法院（院長＝周強）、最高検に当たる最高人民検察院（院長＝曹建明）の五大国家機関における「共産党フラクションの代表」すなわち「党組書記」の参加を求めて、それぞれの代表から当該部門の「活動報告」を行わせた。報告を聞くのは総書記習近平だ。

ここで張徳江、李克強、俞正声はもともと常務委員会のメンバーだから、一見特に問題はなさそうに見える。周強と曹建明とは、ヒラの政治局委員でさえなく、中央委員級にすぎないから、この政治局常務委員級の会議に対しては、呼び出しを受けた際にのみ「列席」できる。周強と曹建明とは、召喚を受けて報告した形だ。これがこの会議の性質になる。ここから張徳江、李克強、俞正声ら正規の常務委員もまた「それぞれの分担をもつ常務委員としての出席」というよりは、事実上、周強と曹建明の例のように、習近平の呼び出しを受けて出席した形にならざるをえない。これは巧みに計算された習近平格上げのイメージ作りに見える。

江沢民時代（1992～2002年）、胡錦濤時代（2002～2012年）の常務委員会議は、メンバー9名がそれぞれの担当分野に全責任を負い、他の分野の担当者は、他部門について口出しをする権限が事実上なかった。これは「九龍による治水」などとも呼ばれる分業責任制であった。江沢民や胡錦濤は、自らを除く8名からそれぞれの担当分野の報告や提案を受ける形で議事が進み、総書記はいわば会議の「単なる司会役」にすぎなかったと評しても言い過ぎではない。

江沢民の場合は、基本的に自らの腹心を配置できたので、思惑通りに処理できたが、問題は胡錦濤のケースだ。胡錦濤時代の人事は江沢民が自らの影響力を極力残すように仕組まれた人事体制のゆえに、胡錦濤カラーを打ち出すことはほとんどできなかった。このような江沢民リモコン体制のもとで、空前の腐敗現象が現れた。

### II-3. トップセブンという枠組み——周永康子飼いを阻む

2014年7月末に処分された周永康は、政法委員会書記として、警察・検察・裁判等司法部門の全権力を握っていた。ここで胡錦濤は周永康の腐敗問題に気づいたとしても、それに「口出しできない慣例」に縛られていた。これが「江沢民執政10年、院政を含めて20年」の間に次第に劣化を加速した「集団指導制」の内実であった。この制度・慣行という縛りに悩まされてきた胡錦濤は、政法委員会書記の地位を常務委員会レベルからヒラの政治局委員レベルに格下げすることを習近平への「置き土産」とした。すなわち常務委員数を9名から7名に減員して、前任政法委員会書記周永康が「子飼いの代理人」を常務委員会に残す道を塞いだ。これが胡錦濤の習近平への置き土産であった。

#### II-4. 王岐山紀律検査委書記の辣腕

さて大会以後に形成された新たなトップセブンの分担体制において、それまでは副総理として国際国内金融を統括していた王岐山に、畑違いの紀律検査委員会書記のポストを担当させた。この措置は、その後の経過が明らかに示すように、敏腕王岐山にしか前任者周永康の腐敗問題を処理できないことを的確に把握した上での人事であった（この人事内定を受けて、王岐山自身は、自らの後継者を周小川に決定し、周小川を全国政協委員の副主席の一人に据えた。これによって閣僚級の周小川の定年は65歳から副総理級の67歳に延びた。腐敗摘発は金融面にも波及するが、周小川に実務レベルの最高意思決定を委ねる措置にほかならない）。新たに紀律検査委員会書記を担当した王岐山は、前任者周永康の直接の後継者が常務委員会にはいないことを奇貨として、存分に辣腕を振るうことができた。

#### II-5. 徐才厚処分伏線——胡錦濤の軍事委員会完全引退

胡錦濤と習近平の「事前の合意」でもう一つ決定的な事柄がある。それは胡錦濤が党大会を機として、軍事委員会の「主席ポスト」を習近平に譲ったことだ。江沢民から胡錦濤への権力引き継ぎの際には、2002年の党大会の2年後の4中全会まで、江沢民が軍事委員会主席のポストにしがみついたので、胡錦濤の軍権掌握は著しく妨害を受けた。この苦い体験に照らして、胡錦濤は習近平に大会直後に主席ポストを譲る決断をしたが、これはたいへんな英断であったことが徐才厚処分の際に明らかになる。

というのは、軍事委員会は2人の副主席と4総部の司令官あるいは部長（総参謀部、総政治部、総装備部、総後勤部）および陸海空軍、ミサイル部隊の司令官等からなり、これらはすべて実働部隊を指揮する「制服組のポスト」である。文民の習近平がただ一人主席として会議を主宰し、軍事委員会主席としての意思決定を行うことができる仕組みだ。これは「主席責任制」と呼ぶ中国流の文民統制メカニズムだ。制服組の司令官たちは、みずからの指揮する実働部隊の責任者としての判断を求められ、意見を述べることはできるが、軍事委員会としての意思決定権は、習近平の一手に残されている。この「主席責任制」に支えられて習近平は、自らの昇格とともに引退した前任副主席徐才厚を共産党から除名する大英断が可能であった。もし、多数決の評議ならば、この処分決断は葬られたであろう。

こうして江沢民の「執政10年、院政10年」期に異常増殖した腐敗問題を果敢に処理することによって、習近平は一挙にトップセブンの「集団指導制」の内実を習近平「個人独裁制」に転化した。いまやあたかも毛沢東のような個人独裁権を掌握し、他の6名のメンバーがすでに従属的地位に転落したことを象徴的に示すセレモニーこそが2015年1月16日会議の「報告」スタイルにほかならないと私は解する。これは6名の常務委員は、担当分野について「報告す

る側」であり、習近平ただ一人がこれを「聞きおく側」の立場に、事実上昇格していることを見せつけるセレモニーなのだ。まさに習近平が「プチ毛沢東」に大化けした瞬間というべきだ。

日本の少なからぬメディアが、習近平の実力について、「共産党史上最も弱い総書記」と軽視しているうちに、本人は大変身した。日本のメディアは、なぜ事態を見誤ったか。取材源が基本的に習近平に敵対する江沢民人脈に限られていたことで致命的弱点をさらけだしたように見える。習近平を見くびり、傀儡化を図る旧勢力が「弱い習近平イメージ」を世論工作のために拡散し、これにひっかかった。これは特派員というニュースの送り手側の問題だ。その背景にあるのは、安倍内閣の中国敵視姿勢であろう。中国敵視・中国脅威・中国封じ込めといった極度に時代後れの戦略に籠絡されて日本世論は、中国問題にほとんど関心を失い、無関心になった。そして「著しく大気汚染された国、腐敗した肉を売る国」といった類のネガティブ・キャンペーンのみが横行した。これにメディア側自身が幻惑されて、習近平の中国の現実を冷静に観察する意欲と能力を失ったものと私は解している。これは 2012 年の尖閣国有化以来の大きな潮流だ。こうして習近平の就任以来の中国の新しい動向に、日本世論は目を塞ぐか、あるいはネガティブな側面にしか興味を示さなかったために事態を読み違えたのではないか。

## II-6. 毛沢東の「小組治国」に倣う

習近平が一挙に権力を掌握したのは、腐敗の象徴としての徐才厚と周永康とを処分したことによるが、その具体的な方法を見ると、毛沢東が文革で用いた「文革小組方式」に酷似している。すなわち「小組治国」である。3 中全会（2004 年 11 月）以後、習近平は①中央全面深化改革、②中央国安委、③中央財経、④中央網信等々、11 個の「領導小組」を新設して、党政軍、立法、行政、司法、経済、文化等国家の一切の権力を習近平個人の手集中した。

中国は 13 億の人口からなり、共産党員だけでも 8000 万人を超える。党とは、いわば「国の中の独立国」であり、党組織自体が極度の官僚主義体制だ。膨大な官僚機構は、どのように機能するか。「習近平の打ち出す新政策」は、ほとんどの場合、官僚機構のルートを通じてねじ曲げられ、各段階の各対策によって、シロはクロに変化してしまう。習近平の指示は、官僚主義と敵対勢力によって、ほとんど正反対のものにねじ曲げられる。こうした官僚機構の各段階で生ずる歪曲を防ぎ、習近平個人の意向を誰の目にも明らかにするためにこそ「小組方式」が必須なのだ。これを新たに設けて、この小組によって伝えられる内容だけが「習近平の肉声」であり、これ以外はすべて「ニセの習近平指示」であることを明示するものが、毛沢東のひそみに習う「小組治国」システムなのだ。習近平がわずか 2 年で、毛沢東方式を活用して、権力を一手に掌握した手腕は刮目に値する。毛沢東からその作風を深く学んだ太子党・習近平にしかできない芸当と見てよいと思われる。

習近平を突出させる措置は、たとえば 2014 年国慶節において、李克強が國務院総理として開いた新中国成立 65 周年慶祝レセプションでも見られた。中国共産党は長らく建国祝賀の会は、周恩来等歴代の國務院総理が講話を發表する伝統が守られてきた。ところが慣例を破り習近平自身がここで主役を演じた。総理李克強は「主役の地位」から単なる「司会者役」に格下げされた形だ。とはいえ、これをもって「李克強の地位に変化が生じた」と見るのは短絡だ。総理としての李克強の地位、すなわち実務を通じて「党務の習近平を支える伝統的な党政構造」に由来する地位にはいささかの変化もないと見てよい。李克強の地位が下がったのではなく、習近平の地位が格段に強められたのだ。両者はそもそも対等ではない。毛沢東に仕える周恩来の姿を「党高政低」というパターンで見れば分かりやすいであろう。

國務院の主催すべき会議でさえもこのありきであるから、党の 3 中全会（2003 年 11 月）、4 中全会（2004 年 10 月）等、党レベルの会議において習近平の「領袖としての地位」が格上げされていることはいうまでもない。たとえば習近平は 2014 年 10 月 15 日に文芸座談会を開き、周小平（著名な若手ブロガー）、花千芳（ネット作家、撫順市作家協会副主席）らに発言の場を与えて周囲を驚かせた。さらに福建省古田で「新古田会議」（10 月 30 日～11 月 2 日）を開き、軍に対する党＝習近平の指導を強調するセレモニーを行った。古田会議は由来毛沢東がゲリラ軍に対する党の指揮を制度としてビルトインした会議として知られている。

## II-7. 習近平語録、その 1

習近平はすでに著作集を 4 冊書いているので、その政治思想を捉えやすい。すなわち

- ① 習近平『擺脫貧困』福建人民出版社 1992 年（1988～1990 年の演説等）
- ② 習近平『之江新語』浙江人民出版社 2007 年（2000～2007 年の演説等）
- ③ 習近平『幹在实处走在前列』中央党校出版社 2006 年（2002～2006 年の演説等）
- ④ 『習近平談治国理政』外文出版社 2014 年（2012～2014.6 年の演説等）、の 4 冊である。

まず、習近平の地位が確立しつつある姿を④『習近平談治国理政』<sup>7</sup>で確認してみよう。この習近平講演集は、2012 年の発言 12 篇、2013 年の発言 45 篇、2014 年 1～6 月の発言 23 篇、計 80 篇からなる。索引を開くと、毛沢東は 18 回、鄧小平は 29 回、江沢民は 7 回、胡錦濤は 8 回登場する。毛沢東思想は 6 回、鄧小平理論は 17 回、江沢民の「三つの代表」は 17 回である。

「プチ毛沢東」としての習近平の面目は、たとえば「大衆路線」を 13 回語るところに現れる。鄧小平時代、江沢民時代、胡錦濤時代にはこのキーワードはほとんど死語扱いで、代わって知識分子の英語力、数学力や I T 技術者の先進的知識に光が当てられていた。科学技術を重

<sup>7</sup> 邦訳『習近平、国政運営を語る』2014 年 10 月、北京、外文出版社。



視する点では、清華大学卒・習近平も前任の総書記たちと同じだが、彼が「反腐敗」のスローガンで虎退治に邁進するとき、その支えは大衆の支持であり、これを大衆路線と呼びながら推進し、大衆の喝采を得ている。

「反腐敗」や「虎・ハエ」のキーワードで習近平講話を調べて見ると、初出は、2013年1月22日「中央紀律検査委の第2次全体会議の講話」である。そのタイトルは「権力を制度のオりに閉じ込める」と題され、「たとえ誰であろうと、職務がどれだけ高かろうと、党の紀律と国の法律を犯しさえすれば、必ず厳しく取り調べ処罰される」と語った。「これが決してただの空談ではないことを私 [= 習近平] は、全党、全社会に表明している。厳しく党を治めるため、処罰は決して緩めてはいけない。『虎』(大物)も『ハエ』(小物)も一緒にたたき、指導幹部の紀律違反・法律違反案件を断固として厳しく取り締まるだけでなく、大衆の身の回りの不正の風潮や腐敗行為も着実に取り除かなければならない。党の紀律、国の法律の前に例外はないことを堅持し、それが誰の身に及ぼうとも、徹底的に調べ、決して見逃してはならない」<sup>8</sup>と強調した。

傍点を付した「職務がどれだけ高かろうと」の一句がキーワードになる。これまでは政治局常務委員級以上の高官は「刑ハ大夫ニ上ラズ」の慣行からして訴追されることはないと広く見られてきたことを踏まえて、高位高官でも「党の紀律、国の法律の前に例外はない」と宣言した。これは習近平が党大会でトップに昇格して2カ月後のことであり、虎退治の盟友・王岐山は、この習近平指示に基づいて、調査に着手していた。

習近平の虎退治2回目の発言は、2013年4月19日「政治局第5回グループ学習会の談話」である。習近平はここで戦国時代中後期の商鞅と法家学派の学説をまとめた『商君書・修権』から「商鞅の変法」の必要性を説いたキーワードを引用した。

習近平の3回目の発言は、2014年1月14日、中央紀律検査委の第3次全体会議の講話である。「腐敗分子に対しては、見つけ次第断固取り調べ、処分する。早い段階、軽い段階で押さえ、病気なら早急に治療し、問題を見つけたら直ちに処理する。腫れ物をそのまま放置して、命にかかわる重病になってはいけない」と語った後で、習近平は解放後に初代上海市長を務めた陳毅[元外相]の言葉を引用する。「[[金銭に]手を伸ばしてはならず、手を伸ばせば必ず捕まる」という道理を幹部一人一人に銘記させなければならない。これは『陳毅詩詞選集』<sup>9</sup>からの引用だ。習近平も一時期上海市書記を務めたが、上海市を解放して初代市長を務めた陳毅元帥の言葉を引用しているのは、太子党の面目躍如だ。

もう一つの引用は、「善を見ては及ばざるが如くし、不善を見ては湯を探るが如くす」という

---

<sup>8</sup> 邦訳 432 ページ。

<sup>9</sup> 北京、人民文学出版社、1977年。

『論語・季氏篇』の言葉である。「善を見れば、とても達成できないかもしれぬと謙虚に努力するとともに、不善を見れば、あたかも熱湯に触れたかのように、即座に離れる」態度をもって「不善を憎むべし」の意である。習近平はこのような言葉で中央紀律検査委員たちを激励し、腐敗摘発を呼びかけた。これらの一連の行動は、大衆からの支持を狙うものであるとともに、習近平の敵陣営を破壊し、直ちに自らの政治的基盤を強化する役割をもつ。

## II-8. 習近平語録、その2

次に㊦習近平『幹在实处走在前列』というタイトルは、「現場で実務をこなし、大衆の前に立って歩く」の意である。この本は、習近平の浙江省書記時代（2002年、副書記、2003-07年、書記）の演説等からなる。この本から文革期のキーワードを拾うと、次のごとくである。

腐敗	50回	目次、見出し等を含む、「腐敗」という二文字の総数
（腐敗現象）	（9回）	以下は「腐敗」の内訳。
（予防腐敗システム）	（8回）	
（腐敗分子）	（6回）	
（腐敗問題）	（2回）	
（反腐敗闘争）	（2回）	
人民に奉仕する	19回	
毛沢東同志	13回	
大衆路線	8回	
毛沢東思想	8回	
文化大革命	3回	これらの3語は、ネガティブな文脈で文革をとらえたもの。
10年動乱	2回	
大民主	1回	

これらの語彙調べから、「人民に奉仕する」「大衆路線」の立場から、「腐敗現象」や「腐敗分子」を批判する習近平のスタンスを読み取ることができよう。反腐敗のスローガンで、政敵を打倒することは、そのまま習近平政権を固めることになるのは明らかだ。

### Ⅲ. 習近平虎退治をどう読むか

#### Ⅲ-1. 「慶親王＝曾慶紅批判」

江沢民の「執政 10 年、院政 10 年」期に中国では、途方もない汚職が蔓延し、習近平は「虎もハエもたたく」汚職追放作戦に就任直後から取り組んだ。その皮切りに選ばれた教材が、なんとフランス革命前夜のエピソードであった。19 世紀フランスの政治学者トクヴィルが『旧体制と大革命』という著書で、革命前夜のフランスを描いた一文を示す。「この政府がこれだけ侵略的であり専制的であったにもかかわらず、最も微小な犯行や軽微な批判でも極度な不安に陥ってしまう」「人々の拜金的な欲望を刺激してはそれを挫折させ、恰も相反する二つの方向から自らの破滅を促している」。

この本は習近平指導部のキーパーソンである李克強首相と汚職追放に取り組む紀律検査委員会書記王岐山が愛読し、周辺に薦めていると報じられたとき、現代中国の独裁権力の腐敗ぶりは承知していたから、やはり「革命前夜のフランス」か、腐敗退治を怠るならば、中国の独裁政権が危ういとする警告と理解した。同時に、愛読書推薦の担い手がナンバー2 の李克強とナンバー6 の王岐山である事実に私は特に着目していた。それはマスコミでは、太子党と共青团との権力闘争が語られすぎて、「李克強首相の地位が王岐山によって奪われる」と見るような軽薄ウォッチャーの間違いを修正する動きと解したからだ。

その後、2 年余、現在に至るも、「太子党が共青团を脅かす」、「李克強の地位を習近平が脅かす」、「王岐山が脅かす」と見る誤解を繰り返す自称専門家が後を絶たない。習近平はあたかも「プチ毛沢東」のように権力を固め、独裁権力をもつに至ったが、それによって「李克強や王岐山の地位が弱くなった」のではない。習近平を支える「助手としての李克強や王岐山の地位」には何ら変化がない。この「党高政低」という構図は、前述のように、毛沢東対周恩来、江沢民対朱鎔基、胡錦濤対温家宝、すべてに共通する「党務優先システム」にほかならない。ちなみに王岐山は党務として紀律検査委員会書記を務め、政務として国務院監察部を指揮しているが、その任務は習近平の指揮のもとで、虎退治作戦を「実行する任務」であり、実践面で、監察部の行政機構を駆使して、摘発チームを派遣し、汚職調査を展開している。これは基本的に紀律検査委という党機構を通じて行う「政務」レベルへの橋渡し活動なのだ。

江沢民の指導体制は、1989 年の天安門事件を契機としてスタートしつつ、一切の政治改革を封印して市場経済への道を歩み、「世界第 2 の経済大国」（購買力平価ベース）になったことは誰もが知る。その裏面は「汚職と腐敗」の高度成長期でもあった。日本の列島改造期にも似た不動産開発ブームと証券市場の急速な発展が不公正取引の温床と化した（たとえば「原始株」操作等々）。開発の許認可に関わる贈収賄の弊害が解放軍所有の不動産を管理する兵站部門にお

よび、ひいては大將・中將・少將のポストまで「買官売官」の対象となる始末だ。一説では将官級の買官疑惑者は 200 名にのぼるといふからすさまじい。

政治改革を封印したまま「荒っぽい資本主義」（ワイルド・キャピタリズム）を加速した結果が「汚職の高度成長」という苦い結果をもたらしたことになる。極め付きは軍の制服組のトップ徐才厚副主席が「買官売官」の嫌疑で党から除名され、徐才厚の情実人事提案に「副署」してきたもう一人の副主席郭伯雄の責任も追及されるに至ったことだ。長男郭正鋼少将（浙江省軍区副政治委員）が全人代の開会前夜の 2015 年 3 月 2 日北京に護送され取り調べ中だ。江沢民によって 47 軍軍長から副主席のトップまで引き上げられた父親・郭伯雄の罪状固めの一環とみられる。江沢民軍事委員会主席を支えた二人の副主席が揃って「買官売官」がらみで失脚とは、空前の事態ではないか。江沢民の提起した「三つの代表」を薄めるために「四つの全面」を前面に押し出す必要性はここにある。

現状を放置するならば、民心は中国共産党や党の指揮する軍から離れ、党による統治の崩壊は必至である。すなわちフランス大革命に類似した中国大革命の再到来だ。習近平の虎退治はそのような危機意識に基づいて着手された。習近平が否応なしに、虎退治に乗り出した直接的契機は、2012 年の党大会前夜の人事抗争にあると見てよい。

習近平は、胡錦濤、温家宝の力を借りて、まず自らの政治的ライバルと目されていた薄熙来（重慶市書記、政治局委員）の処分に成功した。ついで 2014 年 7 月初めに徐才厚（2007～12 年軍事委員会副主席、政治局委員）を処分し、7 月末に周永康（2007～12 年政治局常務委員）を処分した。<sup>10</sup> そして昨年 12 月には令計画（2007～12 年中共中央弁公庁主任）を「組織調査」処分に付した。ここで「組織調査」とは、政法委員会が犯罪の嫌疑で「処分含みの調査」を決定した意である。薄熙来事件が摘発された当時、一部の中国メディアは、「新四人組」として、「薄熙来、徐才厚、周永康、令計画の結託」を指摘していたが、結果的にはその見通しを裏付けた形になる。「新四人組」とは、習近平が中国共産党のトップ指導者に就任する際に、これを妨害し、あるいは「棚上げ」を図った勢力を指す。

江沢民時代に、「経済改革優先、政治改革停止」の政経股裂け戦略を強行した結果、市場経済への移行過程の間隙に乗じた腐敗が生まれ、全面的な腐敗に発展した。ここで鄧小平時代と江沢民時代との大きな違いを一つ挙げておく。鄧小平時代には、太子党の子女は中央委員レベル止まりであり、経済活動のみしか許されなかった。しかし江沢民時代には、この制約が解かれ、太子党の政治局入りを容認した。これによって政治権力と経済権力、そして軍事権力との癒着、結託の構造が定着し、中国版の産軍複合体（ミリタリー・インダストリーコンプレックス）がビルトインされた。

---

<sup>10</sup> 2015 年 6 月 11 日に天津市第一中級法院は周永康被告に対して、無期懲役、財産没収を言い渡した。

では、誰が大泥棒周永康を権力の座に引き入れたのか。曾慶紅前常務委員兼国家副主席である。「第15～18期中国共産党中央常務委員会委員一覧」(図)を見ると、一目瞭然である。2002年秋、引退する江沢民は後継者として曾慶紅を常務委員に昇格させるとともに、常務委員ポストを二つ増やした。7名から9名に増やすことによって、江沢民派を5名(曾慶紅、呉邦国、賈慶林、黄菊、李長春)に増やした。常務委員会の多数派をつくるために恣意的な配置を行った。5年後の2007年秋、引退する曾慶紅が自らの後継者として常務委員に選んだのは周永康である。しかもその担当分野としては、汚職摘発を握りつぶす権能をもつ紀律検査委書記であった。汚職を摘発すべき機能をもつ党務の系統が汚職もみ消しを旨とする腐敗官僚に牛耳られた

### 第15期～第18期 中国共産党中央政治局常務委員会委員 一覧

#### 第15期 1997～2002年

						
1.江沢民	2.李鵬	3.朱鎔基	4.李瑞環	5.胡錦濤	6.尉健行	7.李嵐清

#### 第16期 2002～2007年

						
1.胡錦濤	2.呉邦国	3.温家宝	4.賈慶林	5.曾慶紅	6.黄菊	7.呉官正
						
8.李長春	9.羅幹					

#### 第17期 2007～2012年

						
1.胡錦濤	2.呉邦国	3.温家宝	4.賈慶林	5.李長春	6.習近平	7.李克強
						
8.賀国強	9.周永康					

#### 第18期 2012～2017年

						
7.張高麗	5.劉雲山	3.張德江	1.習近平	2.李克強	4.俞正声	6.王岐山

結果、汚職は摘発を免れ、汚職が汚職を呼ぶ構造となる。こうして空前の腐敗が横行した。

さてこのような体制を放置したならば、フランス大革命の二の舞、すなわち中国共産党の支配体制の崩壊だ。どこから手をつけるか。核心は、周永康の子分たちからなる紀律政法委を解体し、再編することだ。手順としては、常務委員を2名減員して7名体制とし、紀律政法委を常務委員級からひとまずヒラの政治局レベルに格下げする。そのうえで、新たな18期常務委員のなかから王岐山を抜擢して、紀律検査委の再建を任命する。この特別な措置を通じて王岐山はようやく周永康の妨害を排して紀律検査委の再編と虎退治を進めることができた。

全人代前夜の2月25日紀律検査委のホームページに登場した「影射史学」エッセイは、歴史に借りた時評として、波乱を呼んだ。筆者は中央紀律検査委の幹部・習驛である。エッセイのタイトルは「大清“裸官”慶親王的作風問題」(2015年02月25日)である。周知のように、裸官とは、中国には資産や家族を置かず、すぐに海外逃亡可能にしている状態の高官を指す

慶親王奕劻<sup>えききょう</sup>(1838～1917)は、西太后(慈禧)のもとで、首席軍機大臣や内閣総理大臣を務めた政治家だが、「宴会大好き、麻雀大好き」人間であった。「中級幹部の段芝貴が銀10万両を贈呈したところ、ただちに黒竜江代理巡撫のポストを与えた」。英国『タイムズ』の有名記者モリソンによると、「慶親王の預金は712.5万ポンドの巨額に上る。ちなみに作家ジェイン・エアが家庭教師で得た年収は30ポンドにすぎず、ダーウィンが購入した豪邸も2000ポンドだから、慶親王の預金の大きさが分かる」。慶親王はとりわけ英国系の香港上海銀行が好みで、国内の民族金融期間には一銭も預けなかった。もし百年後に生まれていたら、慶親王は「裸官」といわれたであろう。モリソンは少しも気兼ねなくこう書いた。「慶親王のやることは、まるで国家を生き埋めにするようなものだ。ナベの湯が沸騰しているのに、魚自身はそれに気づかない」(まさに日本流なら「茹で蛙」の図柄か)。それゆえ「慶親王のケースは、平和時にリスクを思う(居安思危)格好の教訓ではないか」。

影射史学とは、古に仮託して現代の政治を風刺し、人物を揶揄するものだ。文化大革命期の有名な例としては「批林批孔」がある。「批林」が林彪批判であることは誰にも分かる。「批孔」は孔子を批判する意だが、ここでは「周恩来を孔子になぞらえて」批判したもので、これは江青夫人ら四人組が行ったキャンペーンの一つである。この種の影射史学は、鄧小平時代になると文化大革命の忌まわしい記憶とともに忘れられた。そのような、文化大革命期を思わせるあてこすりが、王岐山の率いるホームページに掲げられたので、大騒ぎになった。「慶親王」とは誰をあてこするものか。「慶」の文字から、賈慶林、曾慶紅説が現れ、いなこれは裸官批判の一般論にすぎまいといった論評が続いた。

### Ⅲ-2. 「裸官慶親王」ショック

これは、明らかに曾慶紅を風刺したものと読むべきだ。キーワードは外資銀行への巨額の預金である。モリソンは英『タイムズ』の特派員として北京に駐在したが、国籍はオーストラリア人である。外国銀行に預けた巨額の預金とオーストラリアから、曾慶紅が息子曾偉をキャンベラに移住させたポイントを容易に想起させる。曾慶紅は 1939 年生まれだから、「もし 1838 年の百年後に生まれたら」という年齢もほぼ重なる。

このあたりが巷間で語られている最中に、米国紙『ウォールストリートジャーナル』が D. シャンボー（ジョージワシントン大学教授）の「中国絶縁声明」を発表した<sup>11</sup>。曰く、①中国のエリートは片足を中国から出して、外国への逃亡を準備している。②「九号文件」に端的に示されるような政治的引き締めが習近平の統治下で深まっているが、これは政権崩壊に対処するためだ。③体制に忠誠心をもつ者でさえも、党活動はやるふりをするのみ。④腐敗が蔓延している。⑤経済発展が減速し、行き詰まっている。これらの 5 カ条を挙げて、かつて旧ソ連が解体したように、中国共産党の支配も崩壊が近づいているとみる。

これらの条件を指摘して「明日にも中国が崩壊する」と語りつづけるオオカミ少年は、枚挙にいとまのないほど大勢いるから、この種の理由づけ自体は珍しくない。ただし、彼のエッセイには大きな特徴が一つある。それは曾慶紅のリーダーシップに対して最高度の評価を行う。その「曾慶紅が処分され、影響力を失うとすれば、もはや中国に希望はない」と分析した。元祖太子党として既得権益を擁護する人々の利益代表を中国発展の担い手とする評価は、どうみ

#### 文革期の太子党

氏名	生年	1966 年当時の年齢と高校、大学	父親	父の地位
曾慶紅	1939	27 歳北京 101 中学、北京工業学院	曾山	内務部長
鄧樸方	1944	22 歳、北京第 13 中学、北京大学物理	鄧小平	副総理
俞正声	1945	21 歳、北京八一中学、ハルピン軍事工程学院	黄敬	第一機械工業部長
陳元	1945	21 歳、北京四中、清華大学	陳雲	党副主席
王岐山	1948	18 歳、北京 35 中学高中 2 年の時、すなわち 69 年 1 月に延安県康坪生産大隊に下放し、姚依林の娘姚明珊と知り合う。西北大学 73-76 年。子女なし。	姚依林	副総理（岳父）
薄熙来	1949	17 歳北京四中高中 1 年級、北京大学	薄一波	副総理
李源潮	1950	16 歳、上海、華東師範大学	李幹成	上海副市長
劉源	1951	15 歳北京四中初中 2 年級、北京師範大学	劉少奇	国家主席
習近平	1953	13 歳、1968 年北京八一初中 3 年、25 中学に転校後に延川県に下放、清華大学	習仲勳	副総理

<sup>11</sup> The Coming Chinese Crackup, *WSJ*, 2015.3.6

でも唐突な内容であり、人々を驚かせるに十分であった。

シャンボアの宗旨替えは何を意味するのか。近年しばしば訪中し、中国の要人や研究者等と交流し、彼らのいう **Responsible Stakeholder-ism** 作りのために努力してきたシャンボアに何が起こったのか。それが「裸官慶親王」ショックにはかならない。私自身は腐敗の根源が江沢民にあることをだいぶ前から見抜いていた<sup>12</sup> ので、江沢民の大番頭役・曾慶紅の失脚に驚くことはなく、むしろ拍手を送りたい気分だ。ところがシャンボアは、曾慶紅一派に望みをつなぎ、米中対話のカウンターパートの黒幕と認識していたという事実には、少なからず驚いた。シャンボアと曾慶紅との交流がどのようなものであったかは知らないが、「米中戦略・経済対話」は数年続いており、しかも対話を止められない事情が双方にあるから、曾慶紅失脚に接して、あわてるのは政治分析家としては、未熟といわざるをえない。いわんや曾慶紅とのパイプ断絶をもって、中国全体の未来を語るのは、軽率と評するほかはない。とはいえ、シャンボアの絶縁声明は反響が大きく、その後まもなく『ニューヨーク・タイムズ』（2015年3月15日号）がバックリーによるインタビューを掲げた<sup>13</sup>。

ここで重要なことは、ワシントンという政治都市では、政策作り優先ですべてが動いている事実だ。近年の米中対話の中心にあったシャンボアの変心がワシントンの対中政策にどのような影響を与えるのか、ポスト・シャンボアの政策プランナーは誰なのか、注視しておく必要がある。曾慶紅処分はなるほど権力闘争には違いないが、権力を得た習近平が何をやるか、それが問題だ。習近平の反腐败闘争は、権力を固めるための手段の側面をもつことは当然だが、権力闘争のための反腐败ではない。浙江省書記時代から彼はこれに取り組もうとしていた。

ここで習近平と王岐山の年齢を見ると（表「文革期の太子党」）、習近平と比べて王岐山は5歳年上だ。処分された薄熙来は習近平より4歳年上、処分を待つ曾慶紅は、習近平よりも14歳年上である。習近平・王岐山 vs. 薄熙来、曾慶紅らの闘争は、太子党のいわば内ゲバである。習近平と軍の劉源、紀律検査委の王岐山らは、太子党のいわば正統派を自任しているように見える。この立場から太子党内の既得権益擁護層に対して、果敢な権力闘争を挑んで、これに勝利しつつあるのが現状と見てよいであろう。（補注2）

## 終わりに——「プチ鄧小平」としての習近平および全方位外交

さて、習近平の内政活動の基調を毛沢東に似せて描いたが、毛沢東時代と現代は、中国内外

---

<sup>12</sup> たとえば『激辛書評で知る中国の政治・経済の虚実』日経BP社、2007年第2章および『中共政権の爛熟腐敗』蒼蒼社、2014年、142～145ページ。

<sup>13</sup> Shambaugh on the Risks to Chinese Communist Rule, *NYT* By Chris Buckley March 15, 2015.



の環境は著しく異なる。中国の政治経済はグローバル経済のなかに深くビルトインされている。それゆえ市場経済の発展を基軸として政策を進めることにならざるをえない。この文脈では、習近平は「プチ鄧小平」の役割を演じて、文革期のような鎖国政策にはもはや戻れない。私は旧著『チャイメリカ』（花伝社、2012年）で詳論したが、米国の国債を保有する最大の債権国が中国であり、2015年現在1兆2391億ドルだ。ちなみに親米派の日本は1兆2386億ドルで、わずかに少ない。1年前には中国が日本より600億ドルも多かった。米中貿易は日米貿易の約3倍であり、米国から見た「日本の地位」に昔日の面影はない。中国国内の社会情勢も高度成長を経て大きく変わりつつある。内外の情勢が激変するなかで、習近平が毛沢東の作風を真似するだけでは、マンガになってしまう。とりわけグローバル経済の潮流は、中国経済を深く包摂している。そこで鄧小平流の沿海地区発展戦略をグローバルに発展させた構想こそが「一帯一路」という海陸シルクロード構想にほかならないのである<sup>14</sup>。

#### 補注

小説『劉志丹』事件は、劉志丹を題材とした小説『劉志丹』が陰謀家康生（1898～1975、没後の1980年10月16日林彪江青集団の一員として党から除名された）によって反党文書だとされた事件。劉志丹は1920年代から活躍した軍人で、長征の先頭に立ち高崗らと共に陝西省北部の陝北ソビエトの確立に尽力。1936年2月21日、毛沢東の「北上抗日」という指示で東征を行い、山西省に入ったところで同地を支配していた国民党の閻錫山軍に敗北し、4月14日に退却の途中に射殺。この一件で彼の故郷である保安県は志丹県と名を変え、追悼大会が盛大に行われた。1954年、中央宣伝部の指示で、小説『劉志丹』が弟劉景范の妻李建彤によって執筆された。その後、習仲勳の助言を得て、1962年までに完成。だが既に失脚していた高崗や1930年代に共産党で極左偏向路線を主導した王明に関わる内容であったことから、陝北地域の党責任者だった賈拓夫は中央宣伝部の審査を仰ぎ、周揚副部長は問題なく出版は可能と結論。出版にこぎつけた。ところが光明日報、工人日報、中国青年報などに連載されると閻紅彦（雲南省委第一書記）が、内容は党中央の評価が必要だと発表に反対し、その報告を受けた康生によって「政治問題であり、処理を求める」と楊尚昆に命じた。62年8月、第8期中央委員会第10回全体会議予備会議で、小説『劉志丹』は高崗の名誉を回復し、党を攻撃する文書だと指摘、9月24日に開催された第8期10中全会で毛沢東は「小説を書いて反党反人民をするとは、これは一大發明だ」と批判した。これを口実に習仲勳、賈拓夫、劉景范らが反党集団と認定され、

---

<sup>14</sup>「中国経済が米国を抜いて世界一になる時、中国封じ込めに失敗した安倍ドンキホーテ政権に未来はあるか——AIIB問題で世界の孤児となった日本」ちきゅう座 2015年4月6日、<http://chikyuzo.net/archives/52164>

習仲勳は党内外の職務からすべて解任された上に下放され、賈拓夫は北京鉄鋼会社の副經理に降格された。1966年に文革が始まると、康生、江青、林彪らは小説『劉志丹』に関わった人間に対して手を伸ばし始める。1967年、人民日報で出版許可を出した周揚について、「反革命両面派周揚を評す」と題された文章を発表して党と国家を篡奪する陰謀を進めていたと批判し拘束した。李建彤は1970年に党から除名され、労働改造処分となるなど、西北反党集団として6万人が被害を受けたとされる。またかつて毛沢東に英雄と評された劉志丹自身もその手からは逃れられず、記念碑が紅衛兵によって破壊された。1978年の第11期3中全会以降、冤罪事件の再評価が始まり、翌1979年には「小説劉志丹の名誉回復に関する報告」で、この小説はすばらしい革命文化作品であり、高崗の再評価問題など存在しないと評価され、10月には再出版された。しかし一部の古参幹部が事実と異なると指摘したため、1986年に習仲勳が調査した結果、「党の歴史的人物の描写は歪曲してはならない」と決定され、胡耀邦の指示で再度発禁となった。高崗はスターリンに内通していた事実が『フルシチョフ回想録』（タイムライフ社、1972年）等で明らかになっており、毛沢東はスターリンの死を待って高崗を処分した。高崗事件は建国初期の中国共産党を揺るがす大事件であった。習近平の父習仲勳はこの事件に巻き込まれ、辛酸をなめた。その父の運命を習近平は幼少の時から身近に観察して成長した。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%8D%E5%85%9A%E5%B0%8F%E8%AA%AC%E5%8A%89%E5%BF%97%E4%B8%B9%E4%BA%8B%E4%BB%B6>

## 補注 2

曾慶紅について校正の機会に補足しておきたい。本論を発表した研究会が行われたのは5月末であった。それから数カ月を経たが、引退後の曾慶紅の地位については、特に目立つ変化はなく、紀律検査委ホームページに掲げられた影射史学の読み方を私は少し間違えたようだ。このエッセイは、曾慶紅あるいはその黒幕としての江沢民を担いで習近平の虎退治に抵抗する勢力への単なる警告に留まるものであり、それ以上の意味を持つものではなかった。9月3日の抗日戦争勝利70周年記念軍事パレード報道における習近平の突出ぶりは、際立っており、これは江沢民や胡錦濤の閱兵とは異なり、建国35周年の鄧小平閱兵に似ていた。

## 付記

本論は、2015年5月28日、専修大学社会科学研究所特別研究助成（土屋グループ）が「中国六十年代と世界」研究会と共催した研究会において発表した「習近平と文革」にもとづく。本論の一部は『情況』2015年6月号に「全人代のテーマ「新常态」と隠しテーマ「慶親王＝曾慶紅批判」」にも述べたので、参照されたい。